

高校生の進路実現に向けた 自己理解の向上を目的とした実践研究

学籍番号 229350

氏名 若曾根眞琴

主指導教員 上田裕美

副指導教員 南野起一

1. 背景

1.1 研究の背景

本教育実践研究は、高校生の進路実現に向けた進路指導及びキャリア教育に関して、「教員の考える生徒にニーズのある進路指導」と「生徒が求めている進路指導」との間に相違がないかを調べた。また、生徒の自己理解の向上を目的に、進学先や就職先等の情報を与える進路指導だけではなく、生徒自身が将来の自己の在り方や生き方を考え、自分の内面の振り返りや自分の強みを見出す為の自己分析をする時間を進路HRで実施した。進路HRでの実践では、「本音ワークシート」と呼ばれるシートを用いて自己分析を行い、自己理解を深める事が生徒の進路実現にどのような影響を与えるのかを検証した。

1.2 本研究の目的と方法

実習校における進路指導がどのように行われているのかを把握しなければならないと考え、進路指導部の先生に進路指導部の各学年における進路指導やキャリア教育の具体的な内容と予定をもとに、進路指導部の先生が各学年における生徒のニーズについてどのように考えているのかという点と、進路指導における課題等について聞き取りを行った。また、進路HRの前後にアンケート調査を実施し、その結果を比較することで自己理解を目的とした進路HRの効果について考察を行った。

2. 実習校における聞き取り調査及びアンケート調査

2.1 聞き取り調査の実施

聞き取り調査では主に、各学年における進路指導やキャリア教育の具体的な内容と進路指導部の先生方が考えている生徒にニーズのある進路指導と課題について聞き取りを行った。聞き取りの内容を踏まえて、「教員の考える生徒にニーズのある進路指導」と「生徒が求めている進路指導」との間に相違がないかという点を明らかにしたいと考えた。また、生徒が現在の学びや取り組みと将来のつながりについてどのように考えているのかを把握することを踏まえて、各学年における生徒の進路に対する意識と勉強に対する意識を明らかにしたいと考えた。

2.2 進路HR直前意識調査アンケートの実施

実習校の1年生と2年生約560名の生徒を対象にアンケート調査を実施し、その内1年生

113名、2年生84名の回答を回収した。アンケート調査の結果より、「勉強などのスケジュール管理ができない」、「やる気が続かない」、「将来の目標ややりたいことが決まっていない」の回答が多かったことから、「実際に生徒が求めている進路指導」は将来の目標を決めたいといった点や、勉強へのモチベーションの保ち方、学習のスケジュール管理の仕方といった点ではないかと考え、これらに対する支援が必要なのではないかと考えた。

3. 自己理解を目的とした進路HRの実施

3.1 進路HRの実施概要

自己理解を目的とした進路HRの実施概要に関しては、実習期間内(2023年4月下旬から2023年11月末)の2年生を対象に視聴覚室にて第1時から第4時の計4回実施し、第1時実施の2週間前と、第4時に計2回にアンケート調査を実施させていただいた。第1時では、自己理解を促進するための「本音ワークシート」を配布し、自己分析を行った。第2時では、民間の企業の方をお招きし、「本音ワークシート」で明確となった自分の興味や関心をもとに、大学で実際に行われている研究についての資料を読み、研究分野から学問、学問から学部、学部から大学を調べた。第3時では、第2時で調べた学問分野から1人当たり2分野選択し、それに関連した外部の方や大学の方をお招きして講演会形式でお話を聞く分野別説明会を実施した。第4時ではこれまでの進路HRの総括と「本音ワークシート」を用いてグループワークを行い、自身のワークシートを他者と共有し、良かったと思うこと等の意見を付箋に貼り意見を出し合うポジティブ・フィードバックと、進路情報をより詳細に調べる時間を設けた。

2.2 進路HR実施後アンケートの実施

実習校の2年生7クラス(国際文化科4クラス、総合科学科3クラス)の約280名の生徒を対象にアンケート調査を実施し、その内250名の回答を回収した。「進学先に求める条件や優先事項」の結果をまとめると、(5)将来やりたいこととの関係性、(9)興味のある分野や学問が学べること、(1)自宅からの通いやすさ、(7)学校の雰囲気や施設・設備面、(2)学費などの費用面となった。また、ポイントの多い順に「本音ワークシートの評価」をまとめると、(1)過去分析(過去編：好きだったこと・嫌いだったこと…)、(3)現在と未来分析(現在・未来編：Will-How-Can-Mustに沿って)、(2)モチベーション・グラフ(出来事を折れ線グラフで表す)となった。

4. まとめ

4.1 考察

研究当初では予想していなかったが、生徒にとって効果的であっただけでなく、教員側の視点から「本音ワークシート」の位置づけを考察すると、このワークシートを通して生徒が記入した内容から生徒の将来の目標や希望進路を把握するだけでなく、生徒の普段の学校生活から読み取ることのできない背景を知り、生徒理解を深め、より生徒一人ひとりに合った進路指導の実現に貢献できるのではないかと考える。これらのことから、自己理解を目的とした進路HRとして用いた「本音ワークシート」は生徒だけでなく教員にとってもよい影響を与えることができるということが分かった。